

悼む

1990年、岡崎一仁撮影



接続語「だけに」の万感

青木先生に接したことのあの卒業生は誰しも今日の別れを、巨匠(きゆうしやう)つ、の思いで受け止めたに違いない。そうした評価はおよそ、先生がよく口にされた作者未詳歌「誇るなくまた恥づるなく生き死にのかの野の草に似なばよと思ふ」の謙退の姿勢にそぐわないが、優しくたおやかで毅然と高みを目指す名花だった。

あおき たかこ 青木 生子さん 日本女子大元学長

昨年11月14日死去・97歳

自分の価値観を信じる、それを先生は終生貫かれた。その第一が第二次世界大戦勃発直後に、岡崎義恵博士の日本文芸学を学ぶために東北帝国大へ旅立った選択に現れている。一億総決起へと時代が波立つ中での、唯一女性に門戸の開かれていた最高学府への出立は、さぞや孤高の選択だったろう。その価値観は学問の方法にも顕著である。教え子の一人、壬生幸子さんは「青木生子著作集」の解説の中で、「著者がまず学生に指導したのは、文学研究は自分の眼で作品を読むことから始めよ、ということであった」と記している。後年、大学行政に尽くされた際の様々な判断も同じである。

先生は物事を説明するとき、「だけに」という接続語をよく使われた。「しかし」とも違う、まして「だから」には遠い「だけに」という語感は、様々な異論を咀嚼して考え抜かれた結論という印象があった。2学部の新設や創立者の文献を蔵する記念館の建設など、学内での異なる価値観を止揚する場面が多かったに違いない。それにもまして教育者の真骨頂を見た思いがするのには、女学校時代の恩師を援けて、学問に飢えていた女性たちへの通信教育の精力投入であるが、「知られざる教育者 高瀬兼介——生涯教育の先駆者」)、この活動を知る人は今は少ない。(日本女大名誉教授・後藤祥子)